

以上の結果を踏まえ工事は予定通りに施工された。

(有馬 伸)

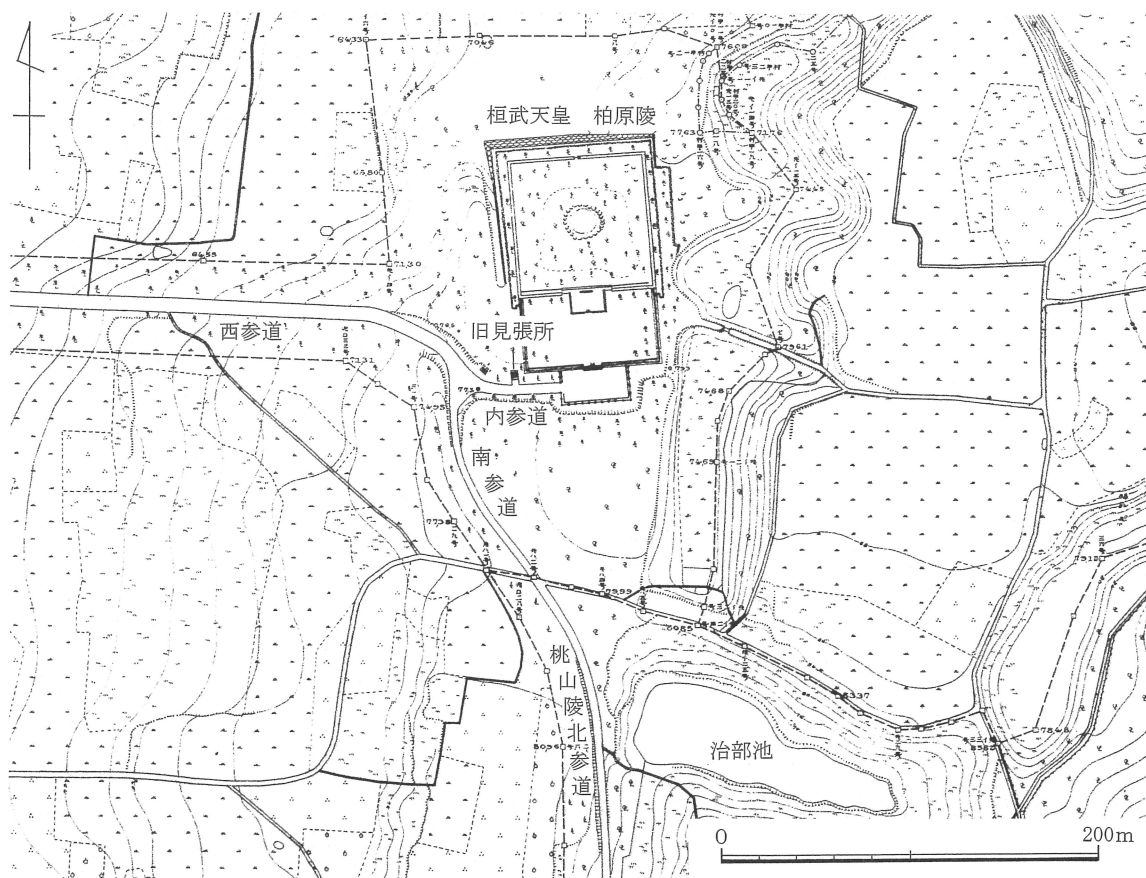
註

- (1) この支丘全体を本陵の「基壇」とする指摘がある。
藤井利章「飛鳥谷古墳集団の復原とその歴史的意義」『末永先生米壽記念献呈論文集』乾、末永先生米壽記念会、1985年。
- (2) 墳形およびその構造については下記論文で触れられている。
笠野 毅「舒明天皇押坂内陵の墳丘遺構」『書陵部紀要』第46号、宮内庁書陵部、1995年。
- (3) 平松良雄「県道野口平田線」『奈良県遺跡調査概報』1999年度 第二分冊、奈良県立橿原考古学研究所、2000年。

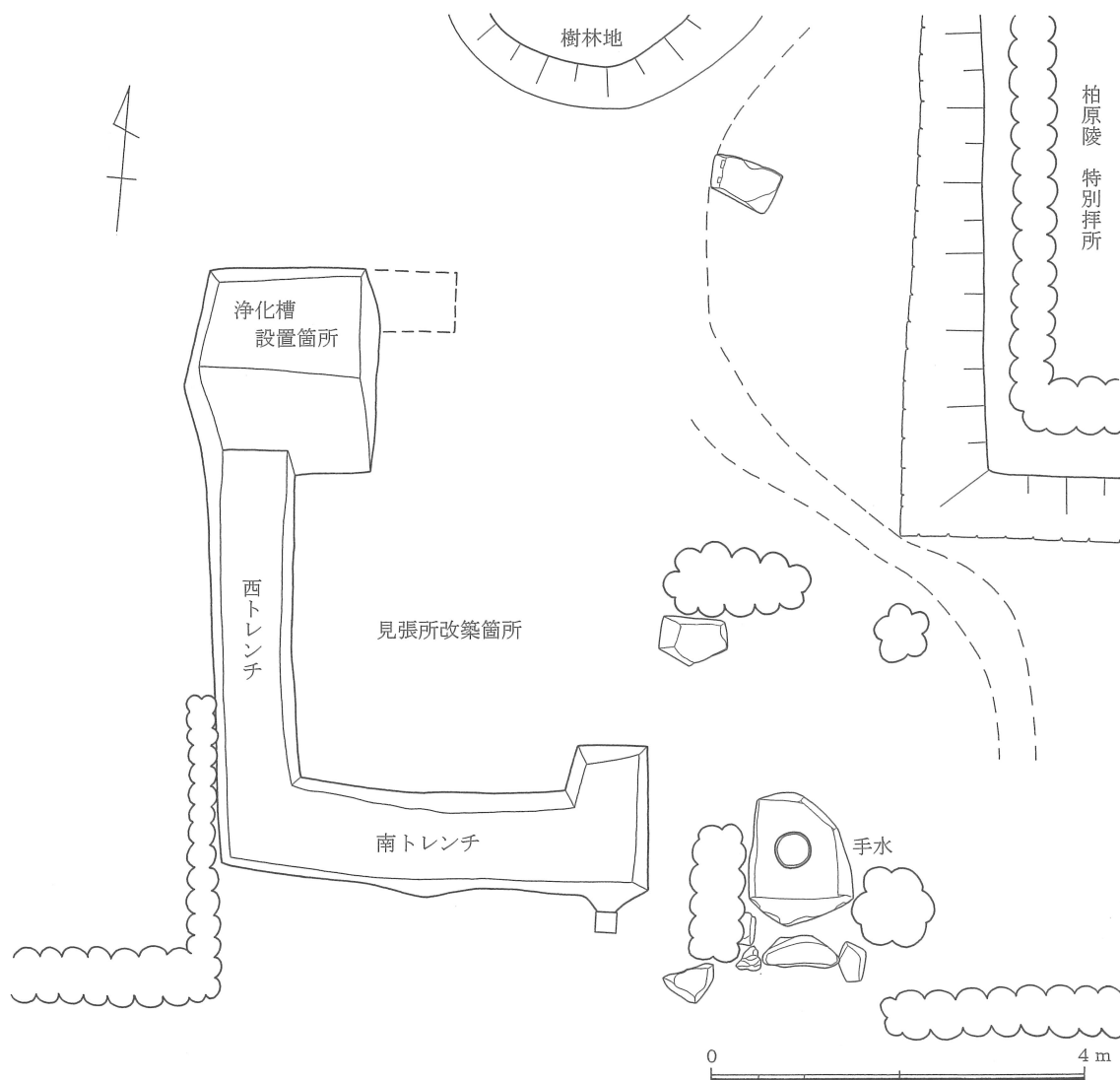
桓武天皇 柏原陵見張所改築工事箇所調査

桓武天皇の柏原陵は、京都市伏見区の桃山陵墓地の西北に位置する。周囲を方形に区画し、中央に径約15mの扁平な円丘が営まれている。『伏見城古図』などによれば、この付近は武家屋敷があったところである。谷森善臣が堀久太郎、永井右近の屋敷地に陵地を考証したことにより、明治13年（1880）、当地に治定されたものである。

この度、当陵の見張所を改築することになり、平成14年11月16日～20日に、見張所改築箇所（約20㎡、深さ0.35m）、および付随する浄化槽設置場所（長さ2.0m×幅2.0m×深さ2.2m）、さらにはハンドホール設置箇所（長さ1.4m×幅1.0m×深さ0.5m）の掘削に立ち会った（第30図）。ま



第30図 柏原陵 地形図 (1/4000)



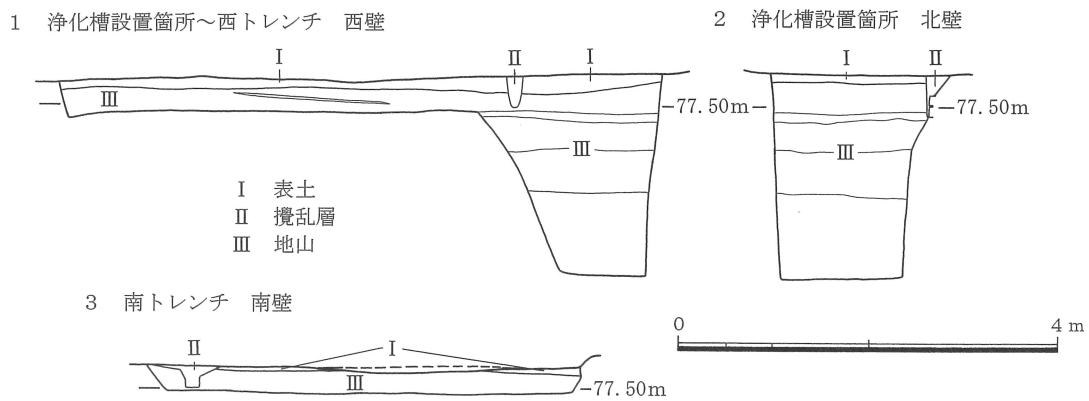
第 31 図 柏原陵 調査箇所平面図 (1/80)

た、12月6・17日、翌15年1月7・8日には、排水枒・ハンドホール設置箇所5箇所(長さ0.5m×幅0.5m×深さ0.5m)、電気線埋設箇所(長さ約60m×幅0.5m×深さ0.3m)、給排水管理設箇所(長さ延べ105.2m×幅0.7m×深さ最大0.7m)の掘削に立ち会った。

見張所改築部分は、内参道の北側に位置し、大正6年(1917)に建てられた既設の見張所を南に約1m移動したところである(第31図)。この付近の参道部分(内参道・南参道・桓武天皇陵の西参道)は、基本的には低丘陵の谷筋を利用して形成されている。そのため、周辺部分に比べてかなり低くなっており、整備の過程で大規模に削られたことが予想された。

見張所改築部分は南側と西側(南トレンチ・西トレンチ)を深さ35cmほど掘削した。西トレンチの北側は浄化槽設置箇所となっており、この部分については深さ2.2mまで掘り下げた。その結果、厚さ約10cmの表土を除去すると、地山である灰褐色混じりの黄褐色バイラン土が認められた。浄化槽設置部分の床面では、黄灰色砂質土混じりの礫層となっていた(第32図)。

また、排水枒・ハンドホール設置箇所、および電気線・給排水管理設箇所のうち、参道部分に位置する箇所では、見張所改築箇所と同様であった。一方、桓武天皇陵南参道西側の樹林地内の



第32図 柏原陵 調査箇所断面図 (1/80)

掘削にかかる箇所では、あつく堆積した腐葉土の下は、黄灰褐色バイラン土を混じえた黒灰色土(盛土)であった。

このように、今回の調査により、桓武天皇陵の南参道および内参道は当初の地形を大きく削り取り、整備されていることが明らかとなった。

遺物は、いずれの調査箇所においても認められなかった。

工事は予定どおり施工した。

(福尾正彦)

開化天皇 春日率川坂上陵進入路設置その他工事箇所の立会調査

本陵は、奈良市油阪町にあり、主軸を南北に向ける全長約100mの前方後円墳である。この度、奈良部事務所裏に新たに進入路を設置することとなり、平成14年7月29日～8月1日の間本部職員が立会い、その他工事期間中は監区職員が随時立ち会った。

付近一帯は、江戸末期には隣接する西照寺の墓地であったことが知られており、過去に鳥居改築工事に伴って行われた調査では、蔵骨器などが多数出土している(本誌28号参照)。

今回の調査地点は、第33図に示したとおり、奈良部事務所の西側にあたり、外構囲障の土堤を断ち割った上で、石積基礎設置箇所2箇所と排水管理設置箇所の掘削を行った。

石積基礎設置箇所(第33図断面A・C) 掘削規模の大きい南側(断面C)で長さ6m×幅約0.8m、外構囲障の土堤の断面も合わせて深さ(高さ)は約2mである。I～IV層が確認された。表土(I)の下は厚い外堤の盛土(II)で、石積との関係から現在の境界を確定した際に築かれたことがわかる。その下には外堤を築く前の整地層と思われる暗茶褐色土(III)があり、もっとも下で地山(IV)を確認した。北側設置箇所も南側と同様の状況を示している。

排水管理設置箇所(第33図断面B) 南側石積基礎設置箇所に並行して、長さ約5.5m×幅0.8m×深さ1.5mを掘削し、II～IVの3層を確認した。特徴は石積基礎設置箇所と同様である。

遺構・遺物は認められず、工事は予定通り実施した。

(清喜裕二)